昭和46年10月17日発行通巻32号(毎日曜日発行) 昭和46年2月5日国鉄首都特別扱承認雑誌第516号

AE 朝日=ラルース

10/17
220円
32

週刊 世界動物百科



増ページ！ 日本犬はこの号です

イヌ・シリーズ

3. 番犬

日本犬と世界の番犬のすべてをおさめました

秋田犬，柴犬，紀州犬，北海道犬，土佐闘犬

セントバーナード，グレートデン，ドーベルマン

ボクサー，ブルドッグ，スピッツ，チャウチャウほか

定価すえおき

朝日新聞社

読者のみなさまへ

こんな動物が登場します　動物を機械的に五十音順に並べたものではありません。系統だった分類に従って，われわれの親しみやすいサル類から始め，次の順序と冊数でお届けしています。概説(２)，哺乳類(62)，鳥類(64)，爬虫・両生類(16)，魚類(16)，軟体動物・昆虫類・甲殻類・腔腸動物などの無脊椎動物(32)。

総目次と総索引がつきます　見て，読んで，楽しむ〝百科〟としてだけではなく，引いて調べる〝事典〟としての機能を完全にするため，16冊ごとにその総目次をつけ，また最終192号には詳細な総索引をつけます。この両者によって，動物界の構成がひと目で理解でき，調べたい動物がすぐ引きだせます。

『私たちの仲間』のページ　カラーページをより理解しやすいものにするため，日本の第一線動物学者の執筆による解説や注があります。また〝動物週刊誌〟として，動物界のニュースや話題，楽しい読物，実用記事などを掲載しています。

ファイルで保存してください　全192冊を，発行順に16冊ずつ，美しいファイル（販売中・定価600円）に，とじこんでください。堅牢で豪華な，全12巻の〝動物百科事典〟がそろいます。途中から購読されたかたは，ぜひ第１号からおそろえください。バックナンバーのお求めは，このページ右欄『本誌の購読について』をごらんください。

目　次

世界動物百科　第32号

カラーページ

監修　内田　亨（北海道大学名誉教授）
翻訳　古本耕三（独協大学講師）

私たちの仲間

凡　例

□本文中〔　〕を使ったものは，日本版のために付加した説明である。
□くわしい注釈が必要なものには，その語のあとに〔注１〕と番号を入れ，『私たちの仲間』第31ページに，同番号で記載した。
□動物の種名は，原則として和名（一般に通用している外来語を含む)，学名（イタリック）の順で表記した。
和名の多いものについては，併記したものもあるが，専門家と相談のうえ編集部で決定した。
和名のないものは，英名または仏名をカナ書きで入れ，原語（ローマン）を付記した。
□人名，地名は，本人または，現地読みを原則としたが，慣用の固定しているものはそれに従った。

本誌の購読について

本誌は，全国の書店，朝日新聞販売店で取り扱っております。
毎週定期的に，配達をご希望されるかたは，お近くの，取扱店にお申込み下さい。
なお，本社直接購入のご希望は，下記あてお申込みを願います。送料は，１部につき30円です。

朝日新聞東京本社出版業務部
東京都千代田区有楽町2－3　〒100 TEL 03－212－0131
朝日新聞大阪本社出版業務部
大阪市北区中之島３－３　〒530 TEL 06－231－0131
朝日新聞西部本社販売部出版業務課
北九州市小倉区砂津1－12－1　〒802 TEL 093－53－1131
朝日新聞名古屋本社販売部出版業務係
名古屋市中区栄１－３－３　〒460 TEL052－231－8131

次号予告

10月13日発売



カラーページ

食肉目 裂脚亜目
イヌ科 イヌ属 家犬（つづき）
愛玩犬
プードルなど，小型のスパニエル類，スピッツ類，マルチーズ類，トイドッグ類，雑種犬

人間は自分のつごうのよいように自然をつくりかえる名人です。愛玩犬と呼ばれるイヌもその好例。野性の本能を薄められ，体型まで愛玩用に変えられました。しかし偉そうな顔をしている人間のなかにも，ペット化しているたぐいの多い昨今ではあります。

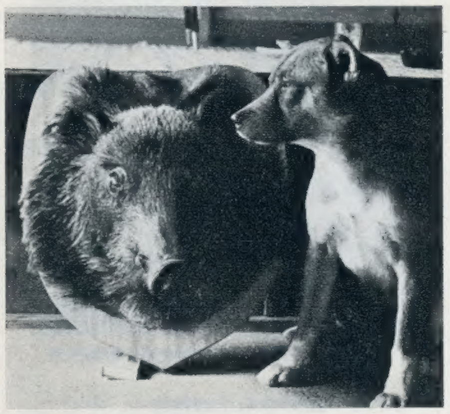
私たちの仲間

大国ニッポンのおイヌさま　編集部
犬猫霊園からドッグショーまで
イヌはなぜ人に飼われるか　内田　亨
カラーページ解説
漢字のふるさと　25　藤堂明保
子グマは外べんけい　畑　正憲
ヒグマと２人のイノシシ　31
夜空の動物たち　1（新連載）　水野良平
はじめてイヌを飼う人へ　前川博司
ペット相談室（特集）

世界動物百科
33号　10／24

現地ルポ

狩猟に生きる日本犬



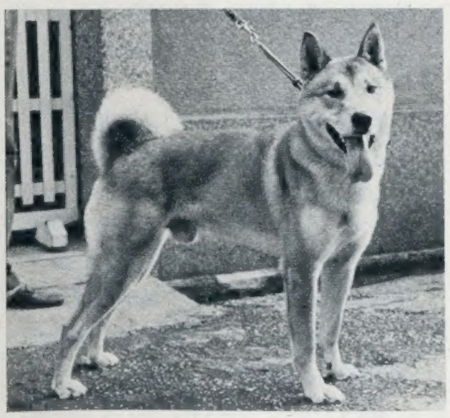
紀州犬　大谷さんのリーダー犬「ハナグロ」



岩手またぎ犬　獲物を探る真剣な目つき



甲斐犬　野武士のような「黒狼号」



四国犬　高知市内に飼われている純血種

村田銃の登場は，猟の性質・方法をまったく変えたという。それは狩猟における「主役」の交代を意味したのである。

それ以前の火縄銃は，ひとたび弾を発射すると，次の装弾まではかなりの時間を必要とする。もし，１発で致命傷を与えることができなければ，手負いの野生動物は，死にもの狂いになってその狙撃者に襲いかかってくる。そのあいだをつなぎ，かつ，獲物を追いつめ，ときには格闘して倒すのが日本の猟犬の役目であった。

しかし，「銃」の使用が禁止されていた時代，状況はさらにきびしいものだった。猟師たちは，そこでは当然にも，猟の成否を全面的にイヌにかけたのである。したがって，イヌのよしあしは生活の「糧」のみならず，生命そのものを左右するほど，生活に密着した重要性をもっていたのだ。

今日の猟は，むかしにくらべてイヌに対する依存度は少なくなり，「主役」の座はむしろ「銃」に移ってしまったが，決してイヌが不用になったわけではない。時代の流れのなかで，「猟」にのみ生きる人もほとんどいなくなり，飼われるイヌ自体にも大きな変化が生まれてきてはいるが，日本のイヌには，その血のなかに，いまだに，昔日の習性を色濃く残しているものが多いという。

そこで，全国に散在する「地犬」と呼ばれるイヌたちが，どのような変遷をたどり，どのような生活をしているかを探ってみることにした。

傷だらけの紀州犬

和歌山県



手負いのイノシシに前足をかみつかれながらなおも立ち向かう紀州犬

紀州のイヌは生きている。

たとえば，７歳の雌イヌ〈シロ〉である。彼女は昨年11月，猟期の開始早々に，ハナグロ（雄５歳），ハナ（雄３歳）とともに65キロ余りのイノシシに立ち向かった。600メートルに及ぶ追跡の後，まずリーダーのハナグロがシシの右わき腹に食らいつき，続いてハナも反対側へかみついた。２匹のイヌに襲われたシシは，イヌを振り放すべくいちだんと速度を加えて，山の下側へ走りおりようとした。すかさず，前に回りこんだシロが，のがさじと正面から突っこむ。頭部をねらってくるシロを雄ジシは死にもの狂いの勢いで迎え撃ち，シロの上あごを鋭く襲った。一瞬の激突の後，両者が離れる。シロの口もとは雄ジシにかみ切られ，白い毛は血で赤く染まった——。

だから，シロの顔つきはすさまじい。口を結んでも，鋭い犬歯からがんじょうな奥歯までまる見えである。このときは20日間ほど傷の手当を要したが，その後もいっこうにひるむようすもなく，イノシシ狩りに出かけている。春先には２頭の子を生み，今はその育児に余念がない。しかし，主人の大谷竜雄さんが，他の２匹を山へ連れだそうとすると，シロも授乳中の子イヌをほうりだして，いちもくさんに駆けだしてくる，張った乳ぶさをゆさぶりながら。

また，たとえば赤毛の〈フク〉である。４歳の雌イヌだが，吉井景勝さんの猟犬４頭のリーダーである。フクの左あと足は，よく注意して見るとほかの３本よりちょっと短い。２歳の冬に，フクははじめてイノシシ狩りに連れていかれ，そのとき，雄ジシにあと足をかみ切られたのだ。骨をくだかれて，ブランブランになった足を引きずりながら，フクは夢中になってシシを追いかけたそうだ。

なりは小さいが，ほえ声も大きく，足も速い名猟犬の初陣の向こう傷だった。フクにはそのほかにも昨シーズンにきばで刺された胸の傷やら，その前の腰のあたりの古傷やら，全身いたるところに傷跡が残っている。

「イヌは体形じゃない。度胸だ」と日高郡中津村の狩人たちはいう。かれらの愛犬は多かれ少なかれ，すべてシロやフクのように，イノシシと格闘したなごりをからだにしるしている。都会で見かける優美な紀州犬とくらべると，中津村のイヌは小がらで，足も短く，あちこちに傷はあるし，ドッグショーにはまったく向きそうにもない。しかし，つら構えだけは，「(自重の）３倍ものを倒す」といわれる気迫に満ちている。

猟師とともにイノシシを追う

イノシシ狩りは，早朝にシシの足跡を捜すことから始まる。5,6人の猟師が手分けをして山へはいり，もっとも新しい，たとえば昨夜のもの，というような足跡を見つけだす。足跡を手がかりにシシの行くえを〝見切る〟と，猟師はイヌとともにシシを追いかける〝勢子〟と，シシの通り道（木のよく茂った薄暗い所）で待ち伏せをする〝射手〟との二手に分かれる。

勢子になるものは，すぐれた狩人であると同時に，イヌのよい使い手，つまり飼い主でなければならない。紀州犬は主人以外のいいつけを聞かず，他人がイノシシのにおいを追跡させようとしても，すぐにもどってきてしまうからである。数頭のイヌを連れていく場合は，さらにイヌどうしの相性というものも考えに入れる必要が生ずる。猟師仲間のイヌ

は、おたがいになじみができてあまりケンカをしないが、見知らぬイヌとチームを組ませることは、ほとんど不可能である。

射手の配置がすむと、勢子はいよいよイヌを解き放つ。

シシのにおいを追跡中のイヌは、決してむだぼえをしない。夜行性のシシが昼間引きこもっている〝寝屋〟(シダの葉の厚く繁茂している所)の2,3メートル手前までいきついたときに、はじめてほえ声をあげる。散らばって追跡していたほかのイヌ、イヌにおくれた勢子、待ち伏せ中の射手、狩りに参加している全員が、シシの発見を知って緊張する。

たいていのイノシシは、イヌにほえたてられ、人間が迫ってくるのをさとると、〝寝屋立ち〟をする。「目の前のシダの揺れが止まったころには、向かいの山へ逃げこんでいる」というほどのすばやさで。地響きたてて逃げるシシの姿をイヌは見失わないようにほえながら追跡する。ほえ声によって、待ち伏せ中の射手は、どの方角へシシが逃走中かを見当づけ、自分の所へくるようなら、ねらいを定めてシシの現われるのを待ち、銃声一発しとめるのだ。

待ち伏せの網をかいくぐってシシが逃げると、イヌとシシの根くらべが始まる。大谷さんのコロ(雌5歳)は、朝の9時に追跡を始めて、夕方の4時ごろ、あきらめて山をおり始めていたかれの前に現われると、谷川の水を飲んで空腹と疲れをいやし、また山のなかへ今度は主人に「ついてくるように……」と振り返りながら、再び追跡を始めたという。

シシに向かって決死の戦い

人やイヌを恐れぬ〝ヤクザ〟なイノシシの場合は、猟も荒れてくる。寝屋からシシが反撃してくるのだ。シシの鼻息のかかりそうなところまで、イヌが近寄っていくと、シシは寝屋から猛然とダッシュして反撃する。75〜112キロ級の大イノシシは、ドラムかんに手足をつけたようで、すさまじい突進力を秘めている。イヌもうかつには手を出せず、すばやく後退する。

シシはイヌを追いはらうと、向きを変え、尻を見せながらゆうぜんと寝屋へもどる。イヌは再びジリジリと間合をつめていく。シシがまた反撃をする。イヌがさっとひく。これを数回繰り返す間に、勢子が駆けつけてしとめてしまえばよい。しかし、勢子の到着がおくれていると、シシがきばでイヌをひっかけるか、イヌがシシのすきを見て、のど、耳、わき腹などに食らいつくかして、猛烈な戦いが繰りひろげられる。

シシとイヌとの戦いでは、まず37キロ以下のシシなら、イヌにも勝ちめはじゅうぶんあるが、大物が相手で戦いが20分以上にもわたるようになるとイヌのほうが殺されてしまう。名犬になるほど気性も激しいので一歩もひかず、シシにやられる率が高くなる。

首尾よくシシがしとめられると、狩人はシシの舌をイヌの数だけに切り分けて、イヌに投げ与え、労をねぎらう。

シシの肉はたいへんに美味で、三度三度食べても飽きないし、シシなべを囲んで猟のてがら話をすると1日の狩りの疲れも吹きとぶという。

シシなべの残りは子イヌに与えられ、あすの猟犬は、ナベのなかのシシ肉と必死になってとりくむ。やがては、その子イヌも山野を駆けめぐって、生きたシシと格闘をするようになっていく。■

故郷を失ったまたぎ犬

岩手県

そこにイヌはいなかった。

はてしなく続く、冷えびえとした寂しげな山々。低くたれこめた雲と、いつしか判別がつかなくなるほどに奥深い陸奥のとある峠を越えたところに、「またぎ犬の里」はあった。

秋田県との境に近い岩手の西端。四方を山に囲まれた細長い盆地、沢内村である。そのむかし、南部藩の〝隠し里〟であったと伝えられるこの村に、しかし、もうまたぎ犬はいなかった。

「そうさなあ。もう50年もむかしに〝中央〟の人がきてなあ、イヌを売ってくれというんだ。それはもう、今と違って貧しいころだ。まさかイヌが金に換わるもんだとは、思いもしなかった。皆、かわいそうとは思いながら、売ったのさ」

と、村の古老は語ってくれる。

大正期から昭和10年代にいたる〝日本犬ブーム〟と、戦中・戦後の食糧事情の悪化による飼育困難の時期を通じて、ごくわずかの例外をのぞいては、この集落からは〝岩手またぎ犬〟と呼ばれるイヌは消滅したのだった。



岩手またぎ犬は戯れのなかにも戦いの表情をみなぎらしている

こうしたなかで、「ごくわずかの例外」になったまたぎ犬を、奥深い山中から集めてきた人がいた。盛岡市に住み「岩手またぎ犬保存会」の看板を掲げる藤尾五郎さんである。

「むかしからイヌが好きでね。イヌのためなら身上つぶしてもいい、と思うぐらい好きなんですよ」

と笑いながら、当時のもようを語る。

「戦争直後の混乱期、沢内あたりで行商をやっていたら、なんか、以前にくらべて、地犬がほとんど見られない。これではいけない、優秀なクマ猟のイヌが消えてしまう、と思ったのが動機ですね」

それから藤尾さんは、イヌにとってはマイナスになるとは知りながらも、〝猟〟から一時期離しても、飼育に便利な盛岡に疎開し、繁殖させよう、と決心したのだそうだ。

戦うための地犬

現在の秋田犬の原型ともいわれる「岩手またぎ犬」とは、「日本犬中型」に属する、岩手県西部の山間部にいた赤毛が多い地犬のことである。日本犬特有の巻き尾と立耳をもつ獣猟犬であり、とくにクマ猟にすぐれていた。「またぎ」とはアイヌ語で「猟師」の意味であるところから、「またぎ犬」とあえて呼ぶのは、根っから猟師と生活をともにしたイヌだからであろう。

そのため、むかしから、1頭でクマと戦う気力と体力を養うように宿命づけられ、子犬のときから、つねに過酷な訓練が続けられたのである。たとえば、4メートル近い幅の沢を渡ること、獲物に向かって一瞬のひるまぬ跳躍力、そして、長い走行力、等々。これらの能力は、猟において、ほかのイヌを近寄らせず、1頭で戦うために必要なことであった。



6頭のクマを倒したまたぎ犬の「黒獅子号」

要するにまたぎたちは、姿・形よりも「クマと戦えるイヌ」を必要としていたのである。

「それはもう、ことばではいえないくらい、すばらしいイヌでしたよ」

と、思い出を語るのは、岩手県紫波町で、「岩手またぎ犬」を訓練している中田敏さん。

「〝黒獅子〟という名まえだったんですけどね。初陣のときは、ヤツもまだ要領というか、カンがつかめなかったんでしょう。クマの平手打ちを背中に受けて、白い肉がはじけるほどの傷になったんですけど、まあ、九死に一生を得たようなもんです」

この〝黒獅子〟は、それ以来クマに対する目つき・気迫がいっそう鋭くなり、結局病死するまでの7年間に、6頭ものツキノワグマを倒したという。

クマとの闘争のもようを、中田さんは目を輝かして、

「ヤツはね、いつも相手の喉・鼻・耳をねらいながら、クマの目をにらむんですよ。すきを見て、一直線にねらったところに一撃を加え、すぐにはねもどってくる、というような繰り返しを瞬時の休みもなく、クマが倒れるまで続けるんですよ。それはもう、ゴムマリみたいに」

と、話してくれる。

通常山中では、イヌは主人の足音の聞こえる範囲の距離を保ち、そして、けもののにおいを風のなかからかぎつけるやいなや、一気に走りこんで、獲物と対峙しほえたてるという。死闘はまさに両者の気迫が伯仲したとき、始まるのだ。とくにツキノワグマとの勝負は、双方の気迫によって決まるともいわれている。

現在、中田さんは2頭のまたぎ犬を飼っている。

「しかし」と，続けるのだ。
「いくら〝クマと戦う〟といっても，むやみに殺させはしません。クマだって，それぞれ個体差がありますから，害を加えるものも，そうでないものもいますからね。それを無差別に殺すのは，自然の摂理に反します」
「要するに，わたしはクマをとることではなく，クマと対等に戦えるイヌを残すことが，ほんとうの意味での〝岩手またぎ犬〟の保存になると思うのです。その点，今の〝日本犬ブーム〟には問題があると思いますがね」
手に力をこめながら語るのである。
確かに，姿・形を重視した保存，レジャーブームの波に乗って，獲物の数をかせぐ機能だけにすぐれたイヌを求めるハンターたち。
こうしたものが現在の風潮のなかにあることは否定できない。しかし東北のきびしい風土のなかで，またぎ犬を育成している人びととの心とは，何かあいいれない〝障壁〟が，そこには厳然とあるようだ。■

本家争いする甲斐犬

山梨県

いささか季節はずれではあるが，怪談めいた話を紹介しよう。20数年前，山梨県の山間部でのことである。
朝，村人が起きると，家の前に異様なものがころがっていた。近づいたその人は，息も止まらんばかりに驚いたのだ。それはなんと，人の「頭」ではないか。しかも顔じゅう傷だらけの「生首」なのである。事件らしいものが起こったことのない，この平和な村の混乱は，推して知るべしであろう。
3,4日過ぎて，犯人はわかった。イヌである。つまり，近くの川原で服毒自殺した人間の屍肉をあさり，食べるところのない「生首」を，主人への「おみやげ」として持ち帰ったということだった。

変遷する甲斐犬

このヤマイヌもどきの野性みをもったイヌが，「オオカミとの交雑」という伝説をもつ，虎毛で有名な甲斐犬である。
ときとして，人跡未踏の崖に穴を掘り子どもを生みおとし，もし，ひ弱で臆病な子どもならば，親がまったく世話をしないというイヌなのだ。こうした過酷なまでの「淘汰」を受けながら育っていく野生的性質は，屈強で優秀な猟犬として猟においてその本領を発揮するわけである。
この荒々しい性質が，いつのころから人間になじみ，ともに生活を営むようになったかは定かでない。しかし，ヒエ・アワ・ムギのみで養われるおう盛な体力と，飼い主に歯のはえかわる時期さえわからせないほどの警戒心は，峻険な山山での猟には，まさに最適だった。
3000メートルを越える南アルプスの山麓に散在する，早川沿いの西山・湯島・奈良田（南巨摩郡），そして山を越えた芦安（中巨摩郡）は，周囲を険しい山々に囲まれた集落である。



甲斐犬の遠吠えは，甲斐の山々にこだまする

そのむかし，狩猟のみによって生計を立てざるをえなかったこの隔絶された村村では，イヌは生活に欠くことのできない貴重な財産であった。それは，古くから伝わる祭りのなかで，村人はイヌを「猟の神」としてあがめ，豊猟を祈願する宴の奉納物は，まずイヌにふるまわれたと伝えられるところからもしのばれる。
このような村人の愛着のためか，また，甲斐犬の他種犬に対する敵対心によるものか，この剛毛の，虎模様の荒々しいイヌの姿は，これらの部落以外には見られなかったと聞く。
しかし，時代とともにこの甲斐犬の「名声」が高まるにつれて，一部愛犬家による他県への持ちだしと，他種犬の移入による交雑の繰り返しなどから，〝自然の姿〟の甲斐犬はしだいに姿を消してしまった。
「ええ，大きさや形はあまり変わっていませんがね，何か違っていますよ。むかしのは，こう，もっと粗野で，頭の形もマムシみたいに，もっと三角形だったように記憶しています。足も，今のより短かったようです」
先祖代々この土地に住む，役場の職員のKさんは思いだす。
確かに現在でも，この村々では，昔日のおもかげを残した「甲斐犬」を飼っている。ダムの建設によって，家々は真新しく装い，舗装道路を車がゆきかうなかに，何かそぐわない野性的なイヌがあちこちで昼寝している姿を見かけるのだが……。

イヌをめぐる人間模様

話は前後するが，昭和の初期，すでに減少の傾向をみせていた甲斐犬を保存するために，地元の山梨県を中心にして，「天然記念物甲斐犬愛護会」が設立された。しかし，村人たちは愛護会になじまず，また愛護会の定めた基準もあいまいだったため，雑犬化はさらに進み，〝自然の姿〟の甲斐犬は駆逐されていったのである。
くわえて，愛護会とは別個に，JKC（ジャパン・ケンネル・クラブ）山梨県甲斐犬支部でも甲斐犬の保存に乗りだしたため，問題はややこしくなってきた。
「むこう（甲斐犬支部）は，『甲斐犬』といわずに『甲斐虎犬』と呼んでるでしょう。それが証拠ですよ。あれは甲斐犬に似た雑犬の集まりだそうです。わたしたちはね，ほんとうの甲斐犬の保存のために人がきらうめんどうなことを，損得勘定抜きに40年近くもやってきたんですよ」
「やっとここまで回復したのに，まぎらわしい名称を使って，横取りするようなことは，許せませんね。まあ，わたしもむこうが何をやっているか，ほとんど知りませんが……」
と，冷淡に突き放すのは，愛護会の幹部。これに対し，
「えっ，まだそんなことをいっているのですか。もう，無視してますよ。むかしは，いいイヌをもっていたらしいですが，おそらく，今は全然イヌをもってないんじゃないですか。つまり，実質的な活動は何もしていないということですね。飼育家のほとんどは，あっちはあてにならないといって，わたしどもの会に移ってきていますよ。あれは，〝歴史がある〟ことだけを一枚看板にしてますが」
「まあ，消滅するのは時間の問題ですね。むこうが，あんまりやる気がなかったので，わたしどもが始めたまでの話ですよ」
語気を荒らげるのは，甲斐犬支部の田中誠さん。
保存団体が2つでき，おたがいに「本家」争いをしているのだ。
「要は，純粋種が少なくなったところにもってきて，天然記念物であるにもかかわらず，政府が積極的な保護政策を推進せず，民間におんぶしてしまったことに問題があったんです」
このように，指摘するのは，むかしからの事情に詳しい日本犬研究家のNさん。続けて，こうも語るのである。
「人間のことですからね。当然，そこにはその土地の実力者たちの〝利権争い〟があって，やたらと名誉職をほしがり，おのおのの保存団体にはいるわけです。その人たちがおたがいに自分の属するイヌを自慢し，相手をなじる，ということから，エスカレートしたわけです」
「審査の基準だって，両方とも変わりがないんですから，そんな〝争い〟をやるくらいなら，その分だけイヌの改良・保存に力を入れてほしいですね」
問題はどうやら，イヌよりも人間の世界にあるようだ。
「甲斐犬の村」にも，この〝争い〟はもちこまれているという。
「なんとかならないですかね。もともと純朴なこの村も，なんかおかしくなってきたんですよ。これでは，イヌがあまりにかわいそうです」
先述した村役場のKさんは，こう嘆くのである。
たとえ，〝雑犬〟と呼ばれようとも，山にすむ甲斐犬は，人間たちの確執などには無関心に，今日もひたすらかれらの獲物の現われるのを待っている。■



獲物を追うときの，甲斐犬の目は鋭い

脱猟犬化した四国犬

高知県



高知県本川村にわずかに残っている地犬

「越裏門は，シシ，サル，タヌキのおすまいどころ」

と，かつてはうたわれたほど，高知県本川村は人里離れたところであった。隣村からの峠は，「辞職峠」と名づけられ，営林署や小学校への赴任者が，その途中から逃げ帰ってしまうといわれた。

コメもとれず，林業のみが唯一の収入源であり，村人はサツマイモやトウモロコシを主食としていた。そのイモやモロコシを荒らしまわる害獣がイノシシであり，村人は作物を守るためにイヌを飼っていた。イヌは忍びこんでくるイノシシを見つけると，四方から取り囲んでほえたて，たちすくんだイノシシは村田銃でしとめられた。小さなシシは，イヌが格闘のすえ，食い殺した。

土佐日本犬のうち，本川系と呼ばれるイヌがこれである。幡多系と呼ばれる土佐犬も，やはり大半が山地という環境のなかではぐくまれた。

1933（昭和８）年，土佐日本犬愛護会が結成され，中央の日本犬保存会と相呼応して，地犬の保護に乗りだした。鉦と太鼓で，本川系，幡多系の猟犬は捜しだされ，高知市へ連れだされた。1940〜41年ころまでには，地元の目ぼしいイヌはほとんど市街へ持ちだされた。

戦争で，そのイヌブームにも一時終止符が打たれたが，戦後再び四国犬（土佐闘犬と区別するために改称）として，全国的にもてはやされるようになった。

猟犬の血はどこへ

そして20数年，本川村から村ひとつ離れた土佐町に住む狩猟歴30年の式地宏吉さんは，

「ええイヌはおらんです。自分らの気に入ったイヌはおりません」という。

式地さんは４頭の猟犬を飼っているが，そのなかに純血の四国犬はいない。本川系の雑種の雌タマ号が，わずかに四国犬のなごりをとどめているにすぎない。３年前に猟師からわざわざ譲りうけたものだが，式地さんの満足は得られていない。

かれの理想とするイヌは，渋みのある（品評会犬のようにスマートすぎない），地足のとびはねない（ピョンピョンとびはねるイヌは山では速く走れない），根性のある（イノシシに立ち向かう気力）イヌなのだ。すなわち，かつての本川系であり，幡多系である。

式地さんも純血のすぐれた猟犬を求めて，都会に飼われている四国犬を，たびたびとりよせてみた。ところが驚いたことに，血統書つきの現在の四国犬は，猟犬としては役だたなかった。

綱をつけて，イノシシの寝屋へ20メートルのところまで連れだし，それっと綱を解き放しても，主人のそばを離れず，シシへ近づこうとはしない。シシが気づいて逃げだしても，追いかけようともしない。逃げるものを見れば，追いかけるのがイヌの本能であるはずなのに，純血犬は恐怖感ですくんでしまったらしい。

全国展優良犬としての栄誉をもつほかのイヌは，山のカンが悪くて山になじめず，10分も山へはいっているとすぐに出てきてしまう。獲物を捜そうなどという猟欲は，まったくうせてしまっていた。

なかで，ましなイヌは，はじめはイノシシに向かっていき，格闘もする。これは掘出し物と，式地さんが思っていると，４回めくらいのシシ猟でシシの反撃に合い，手傷を受けたとたんに逃げ帰り，それ以来シシをこわがりだして二度と近寄ろうとしなくなった。洋犬のように遠くからほえたてるだけでは，〝寝屋射ち〟というシシの巣で，シシをしとめる狩りはできない。

「こんなことはいいたくないが，都会で飼われているイヌはだめです。イヌの根性がなくなっています」

数枚の血統書を手にしながら，式地さんは嘆息する。

イヌを山へ帰すべきか

土佐町にも，近ごろは北海道犬，甲斐犬，紀州犬，さらに洋犬などが，盛んにはいってきている。四国犬に見切りをつけた猟師たちが，暗中模索をしているらしい。式地さん自身もタマのほかに，紀州犬，タマと紀州犬の混血，洋犬を飼っている。しかし，まだ四国犬への望みを捨ててはいない。

もう一度，純血犬の子イヌを連れてきて，山でウサギやシカを追わせながら育ててみよう。一代でだめなら二代三代とかけて，なんとか往年の野性をとりもどさせよう，と考えている。

「メシより好きな猟のために，一生のうちに一度，ええイヌにめぐり会いたい」のが念願なのである。

これにこたえるかのように，「イヌを山へ帰せ」というのは，高知市に住む古城九州男さんである。古城さんは，土佐日本犬愛護会の創立会員であり，本川村から長春号という四国犬の歴史に名高い名犬を見いだし，今日の四国犬繁栄の源を開いた人だが，1942年ごろに，すでに「１年たったら，イヌを山へ里子に出せ」という記事を『日本犬』誌に書いているという。

「日本犬は本来猷猟犬である，というのがわたしの考えです。現在のように形態と血統は四国犬だが，猷猟犬は１頭もいないというのでは，イヌであってイヌではありません」

「そぼく，粗野，勇敢などという日本犬の特質は，猷猟によってきたえられて，その迫力ができたのです」

「わたしなどは，いまや敬して遠ざけられているようですが」と，古城さんはむかしのイヌの気迫をなつかしむ。

当時は，えさも現在のような美食ではなかったので，体高も低かったが，猛獣のように耳が小さく，目は鋭く，口先は短く，ほおが張って，気力があふれており，今のイヌとはまるで違っていたという。だから，古城さんにいわせると，現在の日本犬保存会は，「新日本犬保育会」なのだそうだ。

その高知支部の会員は，「いまや，社会も人間も変わったのだから，イヌも変わるのはむしろ当然で，皆さんが喜んで飼ってくれるイヌをつくりたいのです」という。

「山へ帰さなくとも，日本犬の特質はそんなに簡単に消えさるものではなく，品評会会場での泰然自若たる態度を見れば，その気迫がわかります」ともいう。

どうやら，保存会では愛玩犬のなかに猟犬の性質を残す，という困難な事業をなしとげる覚悟とみえる。式地さんの念願は，いつの日にかなえられるのだろうか。■

日本犬の数はふえても

日本犬保存の運動は，昭和のはじめ，秋田犬，甲斐犬，紀州犬，越の犬，柴犬，土佐犬，北海道犬などが次々に天然記念物として指定されたのをきっかけに，全国的に盛んになった。「日本犬標準」なるものが制定され，「悍威に富み良性にして素朴の感あり，感覚鋭敏，動作敏捷にして歩様軽快弾力ある」イヌを全国諸所ほうぼうから集め，その交配育成につとめだした。努力のかいあって，指定を受けたイヌは，越の犬をのぞき，絶滅をまぬがれて，いまやわが世の春を謳歌する時代となった。日本犬独特の風貌，気性が愛好され，各種のドッグショーはにぎわいをきわめている。

しかし，飼い主の多くは都会人であり，イヌも１日じゅう，イヌ小屋に閉じこめられている。あまりたけだけしいイヌは，番犬としても，危険視され好まれない。いきおい性質はおとなしく，スタイルの優美なイヌが愛好されるのも当然であろう。

一方，生業としての狩猟そのものも消えつつあり，ごく少数の人びとが，シーズンのときだけ狩人になるにすぎない。隆盛をきわめているのは，スポーツとしてのハンティングであり，弾丸を数多く発射し，獲物の数を喜ぶ現代のハンターは，よくほえ，集団性に富む洋犬を用いてのはでな鳥猟やウサギ猟などを好み，じみでチャンスにも恵まれにくいシシ猟には見向きもしない。

このように，猟犬としての日本犬が，じゅうぶんにその能力を発揮できる場そのものが，限られてきてしまっている。

日本犬の保存運動が始められて40年。確かに数そのものはふえたが，かつて存在したといわれる「断崖から深淵をのぞきこむような」奥底の知れぬ凄絶さをたたえたイヌは，山奥の辺地をたずねても，見かけることはまれになった。日本犬もしだいに変わりつつあるようだ。その完全な家畜化も，遠いことではあるまい。■

（本誌編集部　福原・大坪記者）

番　犬

家犬は，イヌ科イヌ属に所属する，生物学的にはひとつの種であるが，用途によって，いくつかに分けられている。ここではそのうちの番犬（guard dogs）を紹介するが，この分け方はかなりあいまいである。というのも，たいていの家犬は，もともと人や家畜，あるいは飼い主の財産などを守ろうとする性質をもっているからである。しかし，人間との長い生活のなかで養われたか，あるいは天性として，警戒心や勇気や強さなどを必要とする，番犬という役割にふさわしい素質をもっている種類がある。それは使役犬ともいえよう。

ここでは番犬として，山地犬，番犬，ピンシェル類，スピッツ類，日本犬，牧羊犬，ブービエ類などについて述べよう。

山地犬

山地犬（mountain dogs）〔注１〕は，おもにヨーロッパの山岳地帯で，牧羊犬や番犬，作業犬などとして使われていたイヌである。それぞれの犬種が近縁関係にあり，かなり大型のイヌが多い。

チベッタン マスティフ（Tibetan mastiff）

このイヌはチベットが原産地だが，おそらく，セントバーナードやニューファウンドランド犬など，あらゆる山地犬の祖先であろうと考えられている。古代ギリシャのアリストテレスは，イヌとトラのあいのこではないかと考え，「東方見聞録」のマルコ・ポーロも，チベット人がすばらしいイヌを狩猟に使っている，と書き残している。毛色は黒で，肢（あし）は褐色，チベットの隊商のなかで荷物を運んだといわれているが，現在のこのイヌは，体高85センチ，体重75キロほどと，むかしほど大きくはない。頭は大きくて広く，鼻づらは四角で，耳は小さくてたれている。長くてこわい毛は，黒か，ときには赤褐色の斑をもつ。



ピレニアンマウンテンドッグ（ピレネー山地犬）。
山地犬はおたがいに，姿，形がよく似ている。
耳がたれ，深い毛におおわれた大きなイヌだ。
山地犬の共通の祖先は，おそらく
チベッタンマスティフであろうと思われる。
PH. VALA-JACANA





2

ピレニアン マウンテン ドッグ (Pyrenean mountain dog)　ピレネー山地犬，あるいはたんにピレネーともいうが，牧羊犬のところに出てくるピレネー牧羊犬とはまったく異なる。ピレネー牧羊犬のほうが，ずっと小さいのである。山地犬のほうは，セントバーナードとよくまちがわれるほど大きいイヌである。このイヌの原産地はフランスのピレネー山地だが，祖先は中央アジアからきたものと思われる。何世紀もの間，ピレネーの谷あいで，家畜の群れをオオカミやクマから守っていたが，18世紀になると宮廷に入れられ，優美な姿と，おとなしい性格から貴族に気に入られ，城の番犬となった。首や尾には柔らかくふさふさとした毛があり，色はだいたい白いが，斑があることもある。体高は70～80センチ，体重60キロほどで，後肢（こうし）に狼爪（ろうそう）がある。

レオンベルガー (Leonberger dog)　ドイツの，スイス国境に近いレオンベルクの町の名をつけたイヌである。セントバーナードとニューファウンドランド犬との交配によって生まれたものと思われ，セントバーナードと同じくらいの大きさである。忠実で愛情にあふれたまなざしをした，利口なイヌである。体毛は淡黄褐色で，顔部はふつう黒である。

セント バーナード (Saint Bernard)　いちばん大きなイヌであり，アルプスの救助犬としても知られている。イタリアとスイスとの国境，アルプスの峠付近のスイス側に，聖ベルナール（セントバーナード）によって10世紀につくられた大セントバーナード救護所があった。そこの修道士によって育てられていたイヌである。のちに，この峠はセントバーナード峠と呼ばれるようになった。ここで雪のなかに迷った多くの旅人が修道士に助けられたが，そのとき，このイヌの嗅覚（きゅうかく）と方向感覚が大きな力となった。な

1

1　セントバーナード。　PH.S.- A. THOMPSON
2　大型ベルン犬。　PH. PRENZEL - PRESS



3

かでも有名なのはバアリーという名のイヌで，このイヌは40人を救い，41番めの人にオオカミとまちがえられて射殺された。現在でも，ベルンの博物館にその剝製が保存されている。体高は70～90センチ以上，体重は77キロ～100キロ以上といったところである。体毛は白と焦げ茶で，毛は長いもの，短いものがある。

大型ベルン犬 (Grand Berne dog)　体高70センチ以下の大きさで，黒と赤銅色の長い毛をもち，胸は白い。肢（あし），額，尾の先などが白いことがある。むかし，ドイツ北部のベルン地方で，籐細工品を運ぶ二輪車を引いていた。

ニューファウンドランド犬 (Newfoundland dog)　カナダ東岸のニューファウンドランド島産の大型犬である。セントバーナードとラブラドールが交配したと思われるもので，セントバーナードが山の人命救助犬であるとすれば，このイヌは海の人命救助犬であって，非常に泳ぎのうまいイヌである。産地では，二輪車を引いたり，魚とりの網を引いたりしている。体高70センチ，体重65キロ余りで，忠実で穏やかなイヌとして世界的に評価されている。



4

3　ニューファウンドランド犬。　PH. BUZZINI
4　レオンベルガー。　PH. BUZZINI



1

3



2



1　ボルドーマスティフ。　*PH. BUZZINI*
2　グレートデン。ぶち毛。　*PH. S.-A. THOMPSON*
3　ブルマスティフ。　*PH. BUZZINI*



4



5

番　犬

番犬(guard dogs)の仲間は，山地犬以上に堂々としたタイプである。しかし種類はそれほど多くない。他のイヌにくらべ，その姿も，吻（ふん）の長い大型犬，肢（あし）の曲がったもの，顔のひしゃげたものと，変化に富み，祖先が同一でないことは明らかである。

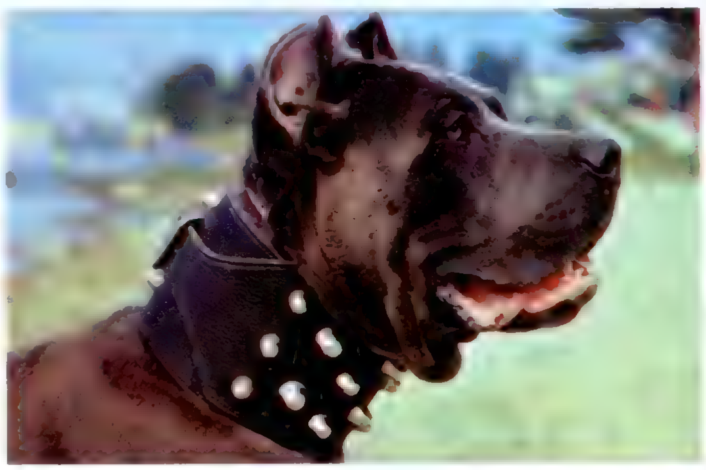
中世ヨーロッパには，番犬の源流であるチベット原産の古代犬種，モロッソ犬（Morossas dog）のなかに３つの変種がいた。それらに，ほっそりしたもの，ずんぐりしたものがあり，それらの交配の結果が，現在のようになったと思われる。

グレート デン（Great Dane）　貴族のように高尚な気品に満ち，堂々としたイヌである。原産はドイツかデンマークかはっきりしないが，むかしはイノシシ狩りにも使われていた。体高80センチ，体重55キロの大型犬である。飼い主に忠実で，見知らぬ人には警戒し，子どもには手かげんをする，頼もしいイヌである。嗅覚（きゅうかく）があまり発達してないので，夜になると飼い主を見分けられない，などとおおげさにいわれている。光沢のある体毛は，淡黄褐色，黒，青といった１色か，トラのような縞か，あるいは白と黒の斑紋のあるぶちである。頭は長くのび，ストップがはっきりしており，吻は切りおとしたようで，耳はぴんと立っている。尾は飛節（ひせつ）まで達しており，下げている。

マスティフ（Mastiff）　イギリスドッグともいわれて，古くからイギリスにいるイヌだが，祖先はチベットのマスティフだといわれている。体高76センチ，体重75～80キロといったところである。紀元前55年にローマ人がイギリスを攻めたとき，このイヌはローマ軍に対して勇敢に戦ったので，ローマ軍は戦後に，ライオンと戦わせようと連れて帰ったといわれる。毛は短く，色は淡黄褐色だが，トラのような縞のものもいる。耳と吻が黒い。

ブル マスティフ（Bull mastiff）　名まえのとおり，ブルドッグとマスティフの混血によってできたイヌで，両犬の能力をよく受けついでいる。体高70センチ，体重50キロと，マスティフよりも小がらだが，逆に，活発でスピードもあり，また冷静でもある。毛は短い。他人に対しては極度に警戒心が強く，自分は死んでも飼い主を守るといわれる。顔は幅広く，四角であごが少し突きだしている。筋肉質のからだをして力が強く，嗅覚も鋭く，静かに敵に近づくので，密猟監視人に同伴する。

4　グレートデン。　PH. F. PRENZEL
5　マスティフ。　PH. LAROUSSE
6　イタリアンマスティフ。　PH. PRATO



6

ボルドー マスティフ（Bordeaux mastiff）　フランスのボルドーのブドウ畑の番犬だったが，ブドウ酒のもつイメージとはおよそかけ離れた獰猛な顔つきをしている。くしゃくしゃな顔で，吻は先端を切りおとしたようになっている。首は太く，からだはがっしりしており，色は淡黄褐色だが，顔の中心部，すなわち吻の周囲だけは赤か黒である。体高60～75センチ，体重50キロほど。

イタリアン マスティフ（Italian mastiff）　ナポリタンともいわれるが，イタリアのマスティフで，どっしりとした顔に，短くて大き





1　ボクサー　PH. BUZZINI
2　シュナウツァー（スタンダード）　PH. SCHONI

な吻(ふん)がある。からだは長くて，体高60センチ余り，肢(あし)はがっしりしている。毛は短くてこわく，色は，灰色で耳と吻とが黒いか，あるいはからだ全体が茶色かである。

ボクサー（Boxer）　名まえの由来は，イギリス人がボクサー（拳闘家）に似ているといったことからとも，また，祖先のボクスルの名からとったともいわれている。ブービユなどの血を引き，1895年にドイツで完成された新しい犬種である。獰猛な顔に似ず，おとなしい性格で，しかも冷静で従順であるから，警察犬，軍用犬，盲導犬，家庭犬などに広く使われる万能犬である。フランスでは同伴犬〔注2〕としても使われている。体高57～63センチ，体重30キロほどで，からだは淡黄褐色で白い斑がある。断耳したものは立耳。

ブルドッグ（Bulldog）　イギリスの代表的なイヌで，イギリス海軍のマスコットでもある。イギリスのマスティフからつくられたもので，17世紀には雄ウシ（bull）と戦うイヌとして使われた。雄ウシと戦うためのあごは，獅子舞いの獅子のように角張った箱口になっているのを見ても，一度かみついたら放さない性質をうかがわせている。吻は短くて，雄ウシにかみついても呼吸ができるように，鼻孔が上を向いている。しかし，今日では，その闘争性をまったく失い，かむ力もそれほどの威力はなくなっている。また，体重もふえて，活動力もやや鈍くなっている。腰よりも頭のほうが低く，前肢（ぜんし）が後肢（こうし）よりも強い。体高は30～40センチ，体重は25キロ余りである。従順で，利口で，おとなしいので，ほかのイヌと戦う場面も自分から避けるほどだが，おこると恐ろしい。

ピンシェル類

ピンシェル（Pinschers）はもともとドイツのイヌで，イギリスのテリアを思わせる。遠い祖先にさかのぼれば，ピンシェル類，テリア類，スピッツ類は同一のイヌになるともいわれている。ピンシェルとはテリアと同じ意味である。毛の短いほうがピンシェルで，やや長くてかたいほうはシュナウツァ。

ドーベルマン ピンシェル（Dobermann pinscher）　ドーベルマンは，ピンシェルのなかでももっともよく知られており，日本でもふつうに見られるイヌである。1860年にドイツ人のドーベルマンによってつくられたものだが，いろいろな犬種の交配の結果なので，は







っきりした祖先はわからない。しかし，すらりとした姿をした優雅なイヌであることは確かである。顔は長く，筋肉は発達しており，腹は引き締まっている。毛は短く光沢があり，色は黒と赤銅色か，茶と赤銅色だ。耳と尾は短く切ることになっている。勇敢で，しかも感覚も鋭敏なので，軍用犬，警察犬として使われている。体高65センチ，体重35キロほど。

シュナウツァ（Schnauzer） ドイツ産で，その名まえは《口ひげ》を意味している。がっしりしたからだをし，活動的で，テリアに似ている。テリアのようにネズミとりがうまいが，テリアほど攻撃的ではない。からだの大きさで3つに分けられる。標準型(Standard s.)は体高45～50センチで，ずんぐりし，尾と耳が切られている。密生した体毛はごま塩色か，白で，口ひげはりっぱ。大型（Giant s.）は，リーゼンシュナウツァ（Riesen s.）ともいわれ，体高53～63センチ。ドイツで警察犬として使われ，日本でもかつて軍用に使われようとした。小型（Miniature s.）は標準型を小さくしたもので，30～35センチである。

スピッツ類

スピッツ(Spitzs)類は，頭蓋(ずがい)が大きく，吻（ふん）はとがり，ストップはきわだっており，三角の耳がぴんと立ち，尾はふさふさとして背に巻かれ，綿毛の上にかたい毛が密生したイヌである。からだつきは，がっしりとして引き締まり，牧羊犬，そり引き犬，猟犬などとして実力があるが，とくに番犬に適しているものをここで紹介しよう。

ライカ犬（Laika） 1957年，スプートニク2号で宇宙へ飛びだしたソ連のイヌとして知られている。バルチック海沿岸が原産地で，ライカとはロシア語で《ほえるもの》という意味のとおり，警戒心が強くよくほえる。体高45～50センチ，あらい毛がふさふさとして，その下に綿毛がある。色は黒から白までだが単色が多い。シベリアなどではそり引きや猟に使われ，ドイツではたんにスピッツと呼ぶ。

ケースホンド（Keeshond） オランダのスピッツで，改良したウイリアム・ケースとい



3 ブルドッグ。 *PH. SCHONI*
4 ミニアチュアシュナウツァ。 写真 ユニフォトス
5 ドーベルマンピンシェル。 撮影 小暮富夫
6 ライカ犬。 *PH. BUZZINI*



1
2



う人の名をつけたといわれる。ケースは，17世紀に，このイヌを自分の部隊の紋章にした。むかしは，オランダの運河をゆきかう船の上で，泥棒よけの番犬として働いていた。目のまわりは白っぽい毛に包まれ，めがねをかけたようで印象深い。ふさふさした毛は濃い灰色から黒までで，体高は45～50センチ。飼い主によくなつき，知らない人にはよくほえる。

チャウチャウ（Chowchow）　このぬいぐるみのクマのようなイヌは，中国産のスピッツである。古代中国の時代からすでにおり，その祖先は定かでない。中国人は，イヌに求められるあらゆる役割をこのイヌに託した。そりを引かせたり，家や小舟のサンパンの番をさせたり，狩猟に使ったりしたうえ，肉は食用にし，毛皮も利用した。このイヌに与えられなかった役割は同伴犬としてだけであった。革命後の中国ではほとんど影をひそめ，現在ではむしろ外国で淘汰されて愛玩犬，番犬となっている。大きな特徴として，舌に紫斑があることと，吻（ふん）が太く，耳が短くて小さく，すねがまっすぐなことである。クシャッとした顔と，厚い体毛は赤か，黒である。体高50センチほどで，がっしりしている。

日本犬（Japanese dogs）　系統的にはチャウチャウなどと同じように，原始的な性質を残したパリア犬から分かれたものである。縄文時代の遺跡などから骨が出ており，石器時代からいたものと思われる。しかし南北で差があり，南では細形で耳が長く，足も長くて下毛が少ないが，北では全体がむっくりして下毛も多かったと思われ，また南北の中間地域には白黒のまだらのイヌがいたようである。幕末にシーボルトが日本犬を観察しているが，そのころにはまだ規格ははっきりしていなかった。しかし現在では，スピッツ類にはいり，大型犬が秋田犬，中型犬が北海道犬，またぎ犬，甲斐犬，紀州犬，四国犬〔土佐闘犬とは違う〕，小型犬は柴犬といった3つの型に定まっている。共通した特徴は立耳で，尾は巻き尾で背にあがっているもの，たれて（茶筅尾）いるものがいる。毛はそれほど長くはなく，毛色は，赤褐色，茶褐色，虎斑，黒，白などだが，白黒の斑は規格外。黒色犬で目の上に黄斑があると四つ目といって珍重するが，肢（あし）先の白いのは好まれない。国際的には公認されていないが，公認される資格をもっている。番犬としても狩猟犬としても，飼い主にはあくまでも忠実で，粗食に耐え，しかも精悍な，日本人的気質をそなえた日本犬に対する人気は根強い。

1　チャウチャウ　　撮影　小暮富夫
2　ケースホン　　PIERRATO

秋田犬。
《忠犬ハチ公》で知られるこのイヌも
改良を加えられスマートな姿がふえている。(右)
撮影　菅野喜勝





1



2

北海道犬　かつてアイヌ族が本州から北海道に移住するときに連れていったものともいわれ，アイヌ犬ともいわれているが，人間の移住に関係なく元来，北海道に生息していたと思われる。本州以南の日本犬にくらべ，耳が短く顔幅が広く，体毛は綿毛が密である。性質は勇敢でクマ狩りなどに用いられた。現在では千歳系，岩見沢系，日高系などに大別され，それぞれ毛の色などに特徴がある。写真のイヌは千歳系である。体高は49～55センチで，体重は18～24キロ。体色は赤，白，黒と褐色，茶など。カラフト犬とはまったく異なった日本犬である。ここに述べる日本犬は，土佐闘犬を除いてすべて天然記念物である。

紀州犬　おもな産地は和歌山，三重で，骨格が太く，肩の筋肉の発達した勇敢なイヌである。古くからイノシシを狩るイヌとして，熊野猪犬の名で知られている。シカ狩りにも使われるが，イノシシを狩るほうががんじょうなタイプで，シカ，カモシカなどを狩るほうがやや細くてスピードがあるタイプだとされている。毛色は白が多く，白は雪の上では見失いがちだが，紀州ではけものとからみ合っていても猟師が誤射しないためによいといわれている。ほかに赤，黒，ごまなどがあり，全体の印象としては北海道犬とよく似ている。大きさ，その他の規格も北海道犬と同じ。

甲斐犬　甲斐とは山梨県のことだが，むかし中部日本にいた中型犬《越の犬》のなごりが甲斐犬である。毛の色に特色があり，すべてのイヌが虎斑なので，甲斐虎と称される。色は黒虎毛，中虎毛，赤虎毛の３つに区別できる。からだは北海道犬などにくらべてやや小さく，中型犬と小型犬の中間で体高39～45センチ。シカ狩りやタカ狩りに使われた。

四国犬　土佐犬とも高知犬ともいわれ，高知のイヌである。かつて３つの型があり，小型でウサギ狩り用のウザキ〔ザキはイヌのこと〕と呼ばれたもの，体高が高くシカ狩り用のシカザキ，がっしりしたイノシシ狩り用のシシザキとに分かれていたが，現在では展覧会で見ばえのするシシザキが多く飼われている。大きさ，そのほかの規格は北海道犬と同じである。

柴　犬　全国各地で発生した小型の日本犬でスピッツとポメラニアンとの関係のように，同一犬種における短小型である。名まえの由来は，体毛の色が枯れシバのようだからとか，しばとは小さいことを意味することばなどといろいろいわれているが，はっきりしたことはわかっていない。小さいが勇敢で敏速なので，ウサギや山鳥狩りに使われた。飼い主によくなつき，他人にはなれない日本犬の特性をそなえている。体色はごま，赤，虎，白，黒など。体高39～41センチ，体重９キロほど。

秋田犬　もとは中型日本犬と思われるが，江戸時代から闘犬として用いられていたために，土佐闘犬などの血がはいっており，一般の日本犬の亜犬種と考えられる。現在の姿に固定化されたのはここ数十年で，比較的新しいイヌである。立耳，巻き尾で，大型でがっしりしており，毛は，かつて白地に黒斑が多かったが近年は，白，黒，赤，ごまなど。体高67センチ，体重45キロ余り。狩猟はしない。

土佐闘犬　明治のはじめ，闘犬の盛んだった土佐でつくりだされた。四国犬を土台に，ブルドッグ，マスティフ，ポインターなどの血を入れたといわれる闘犬用のイヌである。顔はマスティフに似て，耳はたれ，箱口で，吻（ふん）は短く，からだの毛も短くて，色は茶褐色が多い。秋田犬よりもわずかに小さい。日本犬とは区別されている。

土佐闘犬。歴戦の横綱の貫禄がうかがわれる。
闘技は，地上２尺３寸（約70センチ）の高さに
直径13尺（約４メートル）の土俵をつくって
周囲を柵で囲う。その中で30分戦うが
鳴き声を発したり，逃げると負けとなる。(32－12)
撮影　菅野喜勝

1　紀州犬。　撮影　小暮冨夫
2　四国犬。　撮影　小暮冨夫
3　柴犬。　撮影　内山　晟
4　北海道犬。　撮影　菅野喜勝


3


4











セントバーナード。家犬のなかでもっとも大きい。このイヌの祖先は，アレキサンダー大王がインド遠征のとき連れてきたといわれるが，その大きな姿には，兵士もさぞ驚いたことだろう。インドから帰る軍隊に従ってアルプスを越えたという。今も，アルプスの谷々にこのイヌの仲間を見受ける。
PH. BAVARIA-SORM.



1



2

牧羊犬

牧羊犬（shepherd dogs）は、古くから家畜の番をしたり、これを害獣から守る仕事をしてきたイヌである。非常に古い時代から、その仕事をしているために、現在の牧羊犬の起源をさかのぼるのは困難だ。牧羊犬の条件としては、どんな天候にもめげず、しかも疲れを知らず、何時間も走れなくてはならない。その結果、敏捷性、耐久力にすぐれた、ヒツジよりも小さい中型犬が使われる。また、仕事の内容は、道に迷わずに群れを小屋から牧場に連れていくことで、かつてのように、他の動物から群れを守るといった必要性は薄れている。群れを守っていた大型の牧羊犬は、今は番犬や警察犬として利用されている。牧羊犬の多くは立耳で、吻は長い。その毛が厚いので《シェパード》とも呼ばれる。〔注3〕

ボオス牧羊犬（Berger de Beauce）　フランスのイヌで、ボオスロンともいわれる。体高70センチほどの大型犬である。毛は短く、色はほとんど黒と赤銅色が多く、単色かぶちである。顔は長くて、ふつう断耳している。尾は断尾せず、ややふさふさした毛に包まれている。

ブリアール（Briard）　フランスのブリ地方の牧羊犬で、祖先は12世紀にまでさかのぼれるが、はっきりしない。体毛が非常に長く、しかも、かたくもじゃもじゃしていて、ヤギの毛のようである。ひげはもちろん、顔じゅう毛だらけで、目も毛に隠れている。利口で人なつこく、見た目にも楽しいイヌである。



3

シェパード。（32—13）　PH. BUZZINI
コリー、ラフコリー。（32—14, 15）　PH. A. WILLIAMS - ARMEZ
1　ブリアール。顔の部分。　PH. BUZZINI
2　ブリアール。　PH. BUZZINI
3　ボオス牧羊犬。　PH. BUZZINI



1



2



3



4

体高約70センチは、ほぼ体長と等しく、正方形の感じがする。色は黒、濃い灰色、黄色っぽい褐色で、白は規格外。断耳をする。

ピカルディ牧羊犬 (Picardie shepherd) フランス北部の産で、中型よりやや大きく、野性的な顔をした、よく苦難に耐えるイヌである。吻（ふん）はがっしりして、あごもじょうぶで、あごや口にひげがあり、立った耳もあらい毛におおわれている。肢（あし）は長く、全体に筋肉質で、しかも毛はわりあいに長くてこわい。色はグレーか淡黄褐色で、胸と肢先が白い場合がある。激しやすく、闘争的であるが、うまくヒツジを導く。

ピレネー牧羊犬 (Pyrenean shepherd) 番犬の最初に述べた、ピレニアンマウンテンドッグとはまったく違ったイヌである。フランスのピレネー地方の谷々に、それぞれ交流がないままできていったいくつかの変種を、ひとまとめにした呼び名である。中型の牧羊犬で、体高は50センチ以下。吻は短く、その顔はクマに似ている。毛はふさふさしており、軽く波打っていることもある。色は淡黄褐色、グレー、あるいはぶちのこともある。尾は、短いままで生まれてくるのもあるが、ふつうは断尾する。

ラングドック牧羊犬 (Languedoc shepherd) フランスのイヌで、ボオス牧羊犬をやや小さくしたような姿をしている。カマルグ牧羊犬などの呼び方もある。毛色は黒か赤銅色が多いが、ときにはぶちもある。体高50センチ以下。

サボワウ牧羊犬 (Savoie shepherd) フランスのイヌで、それほど固定した犬種ではない。中型で体高45～55センチ、体重25キロ以下である。吻はしっかりして、耳はたれ下がっている。かなり長い毛がえり飾りのようになっており、尾は先が太くなって、スピッツ類を思わせる。

アルジェリア牧羊犬 (Algerian shepherd) アルジェリア産の牧羊犬で、カビリア牧羊犬 (Kabyle shepherd) とか、またはドゥアール犬 (Douars dog) とも呼ばれる。すばらしい嗅覚（きゅうかく）の持ち主で、自分のヒツジの群れにまぎれこんだほかのヒツジを選び分けることができる。かなり大型のイヌで、毛はわりあいに長く、色は白色が多いが、ときには淡黄褐色とのぶちもある。耳は立ち、尾はふさふさした毛に包まれ、吻は長い。激しやすい性質である。

シェパード (German shepherd) 正しくはドイツ牧羊犬で、アルザス牧羊犬とも呼ばれ、あるいはたんにシェパード〔英語で牧羊者あるいは牧羊犬の意味〕と呼ばれているほど有名な犬種で、日本でシェパードといえばこのイヌのことである。ドイツでは、現在でも4万頭ものシェパードが、牧羊犬として使われているといわれている。警察犬、軍用犬、盲導犬といった高度な仕事をやりとげる、知力と忠実さ、つねにさえた注意力を兼ねそなえている。また、アルプスでは、なだれにのまれた登山者を救う救助隊の道案内として使われる。それは、雪に埋もれたヒツジの足跡を追って、ヒツジの群れを見つけることができるといった、伝統的に鋭い嗅覚を利用したものである。しかしそれは、あくまでも肉体的、精神的な訓練によってつくられるのである。このイヌは毛の長さによって3つの種類に分けられるが、一般的には毛の短いものが多い。色は、黒、黄褐色などいろいろあるが、白だけは規格にはずれる。体高は60～65センチである。

ベルギー牧羊犬 (Belgian shepherd) グレネンデール (Groenendael) と呼ばれるベルギー産の牧羊犬で、長くて黒いあらい毛をしており、シェパードを小さくしたような姿をしている。牧羊犬、番犬が主だが、知能的なの

1 ピカルディ牧羊犬。 PH. BUZZINI
2 マリノワ。 PH. BUZZINI
3 ピレネー牧羊犬。 PH. BUZZINI
4 シェパード。 PH. ARONS

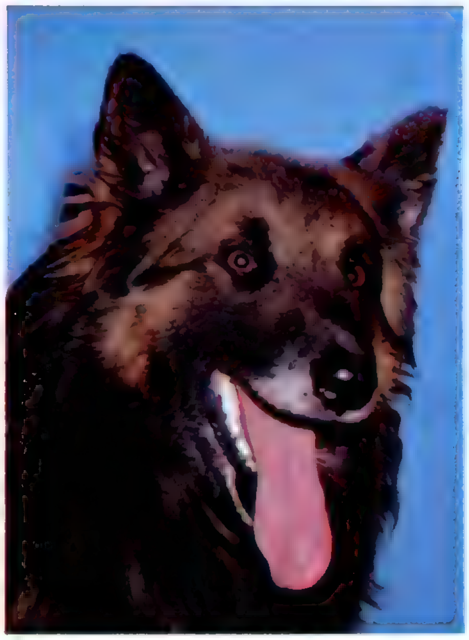


5

で、警察犬としても使われている。大きいものでは体高60センチ、体重25キロくらいのもある。シェパードよりもおとなしい。

ベルギアン テルビュラン(Belgian tervueren)　これもシェパードに似たベルギーの牧羊犬で、毛の色がくすんだ黄褐色であることをのぞいてはベルギー牧羊犬とほとんど同じである。先祖は同一犬種と考えられ、両者のあいだでよく交配が行なわれているが、黒い2匹のベルギー牧羊犬から、褐色のテルビュランが生まれたり、その逆のこともある。また、1腹に、両方の幼犬が生まれることもある。からだの大きさは、ベルギー牧羊犬と同じ。

マリノワ(Belgian malinois)　毛の短いベルギーの牧羊犬で、ほかのベルギー産牧羊犬と近縁関係にあると思われる。シェパードに



6



7

5　シェパード　PH PRENZEL PRESS
6　ベルギアンテルビュラン　PH PRENZEL PRESS
7　ベルギー牧羊犬　PH BUZZINI



1



2

よく似ている。毛の色は淡黄褐色で、顔は黒い。体高は、前2者と同じである。

オールド イングリッシュ シープドッグ
(**Old English sheepdog**)　オールドといっても、200年ほどの歴史しかないイギリスの牧羊犬である。フランスのブリアールによく似ているが、類縁関係があるかどうかはわからない。目も隠れてしまうほどの毛におおわれているが、意外に活発で、ヒツジを導く牧羊犬というよりもヒツジの番犬といったタイプである。聴覚、嗅覚（きゅうかく）が、視覚の弱さを補っている。毛色はふつうグレー系統で、からだは大きく、体高60センチもある。

コルギー (**Corgi**)　イギリス、ウェールズの小型牧畜犬で、ペンブローク（**Pembroke**）とカーディガン（**Cardigan**）の2つの種類があり、いずれも肢（あし）が短くて、しかもたくましい。肢が短いということは、家畜を牧草地に誘導したり、連れもどしたりするとき、家畜の後ろからすばやく肢にかみついて導くのに便利だ。胴長だが、スピードがあり、機敏である。両犬を比較すると、カーディガンのほうが古い犬種で、体高は低く、胴は長く、前肢（ぜんし）が曲がっていて、骨格はやや太い。尾が長く、耳はペンブロークにくらべ

1　オールドイングリッシュシープドッグ。　PIL ARMEZ

2　コリー（ラフコリー）。　撮影　小暮富夫



3



4

てとがっている。性格はペンブロークのほうが興奮しやすいようだ。現在では２つともたいへんよく似ているが，ある時期に混血した結果だといわれている。両者とも番犬として使われている。体高約30センチ，体重11～12キロほどである。

ボーダー コリー（Border collie）　ボーダーテリアとともに，イングランドとスコットランドの境界地方が原産地である。小がらでそぼくな姿をし，利口で耐久力に富んだ，まったくの牧羊犬である。いわゆるふつうのコリーが，牧羊犬から展覧会用のイヌとして転身してしまったあと，このイヌが多くのヒツジを預かっている。体高50センチ，体重24～25キロ余りで，黒と白，あるいは黒と赤銅色と白である。牧羊犬として世界じゅうに輸出されている。

コリー（Collie）　スコットランドの牧羊犬のなかでいちばんよく知られているイヌで，人為淘汰によってその血統にみがきがかけられている。コリーには，からだの毛の長いラフコリー（Rough collie）と，毛の短いスムーズコリー（Smooth collie）とがある。２つとも毛の違いをのぞいてはまったく同じである。一般には，ラフコリーのことをたんにコリーと呼んでいる。ラフコリーは，利口そうな顔をし，全身美しい毛に包まれた姿は，多くの犬種のなかでも指折りの優雅さといえよう。コリーは，朝，ヒツジを牧場に連れだし，終日その番をして，害獣やヒツジ泥棒から守り，夕方にはまた牧舎に連れ帰る仕事を忠実に行なっていた。また，コリー１頭で50頭のヒツジを管理できるといわれていた。ところで現在のコリーは，家庭犬として，あるいは同伴犬としての新しい職場に変わってしまった。体高60センチ，体重30キロ余りで，体色はさまざまだが，色の対比がはっきりしたものが好まれている。日本ではヒツジを飼わないので牧羊犬は少ないが，札幌郊外の月寒の農林省北海道農業試験場では，昭和40年ごろまでコリーを使ってヒツジを管理していた。



5

3 マレンマ。　*PH. S. E. F*
4 シェトランド牧羊犬。　撮影　小暮富夫
5 コルギー（ペンブローク）。*PH. ANDUA ATLAS PHOTO*



1



2

1　ベルカマスク。　PH.PRATO
2　プリ。　PH.B.LOSTER

シェトランド牧羊犬(Shetland shepherd)　ラフ・コリーを，そのまま小型にしたような典雅なこのイヌは，シェルティの愛称で広く知られている。スコットランドの北東，シェトランド諸島の産で，祖先は，コリーと同じだが，きびしい自然環境のもとで小型化している家畜に合わせて小型化したといわれている。体高約37センチ，色はコリーとほぼ同じ。

マレンマ(Maremma)　イタリアの牧羊犬で，イタリアではマレンマーノといわれる。イタリア中央部にたくさんいて，ピレニアンマウンテンドッグを大きくしたと思えるほどよく似ている。色は白で，体高70センチくらい。イタリア以外ではあまり知られていない。

ベルガマスク(Bergamasque)　イタリアの牧羊犬で，ちょっとブリアールに似た毛の長い大型犬である。もじゃもじゃの毛が顔をおおい，それがあごひげや口ひげにもなっている。顔が大きく，ストップははっきりし，小さい耳は長い毛におおわれている。グレーと淡黄褐色がいちばん多く，体高約63センチ。

プリ(Puli)　ハンガリーの中型牧羊犬で走るのは速く，持久力があり，機敏なイヌである。チベッタンテリアに似ており，遠いむかしに，チベッタンテリアから分かれたものかもしれない。ヒツジがいうことをきかないときは，その背中にとびのって，方向を転換するまで背中の毛をひっかき，いうことを聞か

せるという特技をもっている。からだの毛は長いほうで，とくに吻（ふん）と尾の毛は長い。体高約40センチ。

コモンドール（Komondor）　これもハンガリー産だが，プリにくらべて大きい牧羊犬である。おそらく，9世紀のマジャール人の大侵入といっしょにアジアからやってきたのだろう。白い毛皮におおわれ，体高65センチ以下。

ゴダチュラ（Gos d'atura）　スペインの牧羊犬で，またの名をカタロニア牧羊犬という。軽く波打った長い絹のようなすばらしい毛をしていて，その金色の色調は，黒と白と，淡黄褐色のまざりによってできている。活発で利口な番犬である。耳と尾は断たれている。

ケルピー（Australian kelpie）　オーストラリアの牧羊犬で，スコットランド人が植民した際，連れてきたコリー系統の牧羊犬と，オーストラリアの野生犬ディンゴとが祖先であろうと思われる。体高約60センチ，耳が立っており，利口そうな表情をしている。毛はやや長めで色は黒い。よく働くイヌである。

オーツシャルカ（Owtscharka）　ソ連の牧羊犬で，祖先や外形を異にするいくつかの種類があるが，いずれも従順で，作業能力にはたけている。体高80センチといわれる牧羊犬最大のものもおり，傾向として，大型のものは頭部が大きく，体毛は少し長めである。サウスルシアン（South Russian）といわれるものは，小型で顔も一面毛におおわれており，大きなマルチーズといったものもある。

ラップランド犬（Lapland dog）　スカンジナビア半島の北部をラップランドというが，そこにいる流浪（るろう）の民族〔ラップ人〕に飼われているイヌで，半ば野生化したトナカイの群れを番している。典型的なスピッツの姿をしており，体高40～50センチ，しかもがっしりしたからだつきであり，頭は三角で，尾は背中に巻きあげられている。その厚い毛はグレーで，まっ白ではない。非常に勇敢（ゆうかん）で，トナカイの群れを守るために，オオカミやクマに立ち向かっていく。

プクオク犬（Phu Quoc dog）　シャム湾のなかの南ベトナム領フクオク島におり，あらゆる牧羊犬のなかで，もっともオオカミに似ているイヌである。体高60センチ余り，毛の色は淡黄褐色で，鼻と背の色は濃い。毛は非常に短く，背中ではさか立っている。



3



4

3　フランドル ブービエ　PH. BUZZINI
4　大型スイス ブービエ　PH. BUZZINI

ブービエ類

ブービエ（Bouviers）は，やはりヒツジの群れをよく守るが，本来はウシなどの家畜を守りながら牧場へ連れていくイヌである。その名まえも，フランス語で《ウシ飼い》という意味である。牧羊犬は，多少とも姿がオオカミに似ているけれども，ブービエはモロッソ犬に近く，その子孫だと思われる。牧羊犬はヒツジに対してなにかと心配（こころくば）りするが，ブービエはウシやヒツジに対して，役目以外はまったく無関心である。

フランドル ブービエ（Bouvier des Flandres）ベルギー南部とフランス北部が原産で，広い



牧場のウシ追いに用いられた。毛はあらくてちぢれており，吻（ふん）も毛でおおわれている。体高65～70センチと堂々とした姿で，勇気と力を兼ねそなえており，牧畜犬としてすぐれている。立耳で，尾は切られ，首は太い。毛色は淡黄褐色とグレーが多い。体重40キロにも達することがある。フランドル〔フランダース〕地方のイヌはむかしから有名で，少年とイヌとの美しい友情を描いた「フランダースの犬」などによっても知られる。

ルーレル ブービエ (Bouvier de Roulers) フランドルブービエに近い血縁にあるが，もっとどっしりとしている。フランドルと同じように，がんじょうで，大胆だが，より警戒心が強い。毛色は黒か，ときに毛先がグレーである。

アルデンヌ ブービエ (Bouvier des Ardennes)　ピレネー牧羊犬に似ており，体高は60センチを越えない。これもフランスのイヌで，飼い主にはよくなつき，おとなしいが，見知らぬ人は近寄せない。毛は長いほうで，あごと吻にひげがある。色は不定。

ロットバイラー (Rottweiler)　ドイツ産のブービエで，歴史をたどると，ローマ軍が遠征したときに，軍団の食糧となる家畜の群れを連れてきたイヌが，そのまま残されたものの子孫といわれる。近代になるまで，軍隊が食糧などを運ぶ手段は，家畜に歩いてもらうか，ウマで輸送するしかなかったから，家畜の誘導とウマの管理に，イヌは絶対欠かせなかった。体毛は，黄色い斑のある黒か，あるいはその逆である。体高60センチ余り。

大型スイス ブービエ (Grand Swiss bouvier)　小さいものでも体高65センチと，大きくたくましいイヌで，引きイヌとしてよく使われた。尾は長く，体毛の色は黒と白で，目に赤銅色の斑紋がある。

クワッツ (Kuwatz)　ハンガリーのブービエで，12世紀にトルコからはいったようである。貴族階級の護衛犬として，あるいは狩猟犬としても使われていたという。体高80センチにも達することがあり，吻はかなり長く，ストップは目だたず，くちびるは少したれ下がり，耳もたれている。毛はこわく，かなり長いが巻いていず，少し波をうっている。色は白一色である。利口で，しかも忠実でよくなつくので，現在ではアメリカで知られており，おもに番犬である。

ロットバイラー。
ブービエは《ウシ飼い》の手助けをする。
力の強い大型のイヌで，やはり田舎くさいから
牧羊犬ほどのスマートさは求められない。
PH. F. PRENZEL

日本のイヌ
——その特性と歴史——

内田　亨

日本には，イヌはすでに狩猟生活をしていた縄文時代からいたことが遺骨によってわかっている。縄文時代には化石種，ディンゴ，パリア犬などのプティアティニ型犬 *Canis familiaris putiatini* がおり，次の農耕の始まった弥生時代には，さらに馴化の進んだスピッツ，日本犬などのポメラニアン型犬 *Canis familiaris palustris* に変わっている。

従来の多くの意見では，これらのイヌは，日本に移入してきた人が連れてきた，とされていたが，筆者は，人類が日本に移入してくる以前，本土が大陸と陸続きであった時代から，オオカミやヤマイヌなどのように野生のイヌがすでに存在していたと考える。すなわち，人間が日本列島に移ってきて，そこで野生のイヌを家畜としたのではないかと思う。

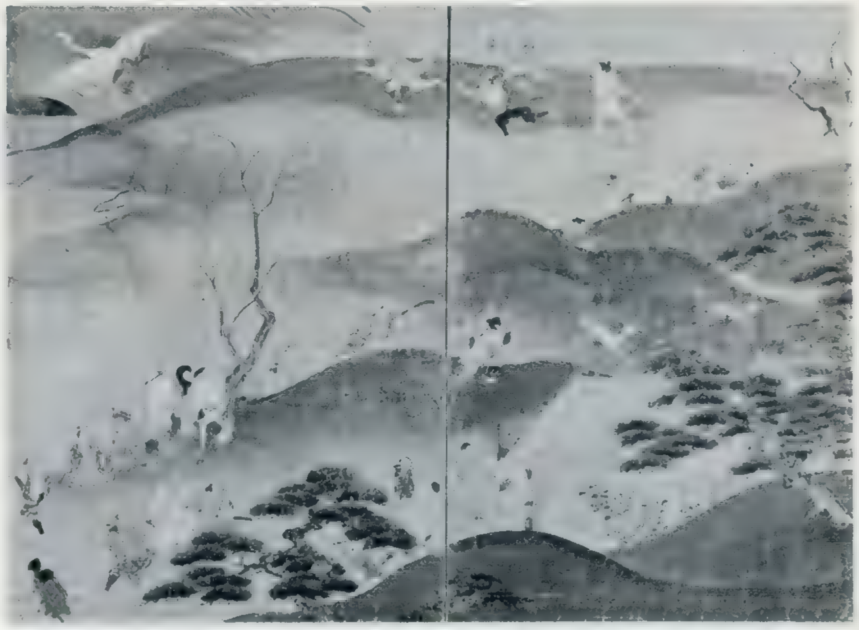
原始型である日本犬

その野生のイヌは，パリア犬型のものと思われる。現在のパリア犬はインドとアフリカに野生しているが，中国大陸にも，以前はこの品種と思われるものが広く分布していたようだ。幕末に来日したシーボルトは，長崎から，日本にいるイヌについて報告しているが，*Canis japonicus*〔ニホンイヌ〕と呼んでいるものは，その形態からみるとパリア犬から移行したものであろうし，明治10年に北海道を旅行したモースの手記によっても，パリア犬の形態と性質をもった宿なしイヌが多数群れていたことがわかる。

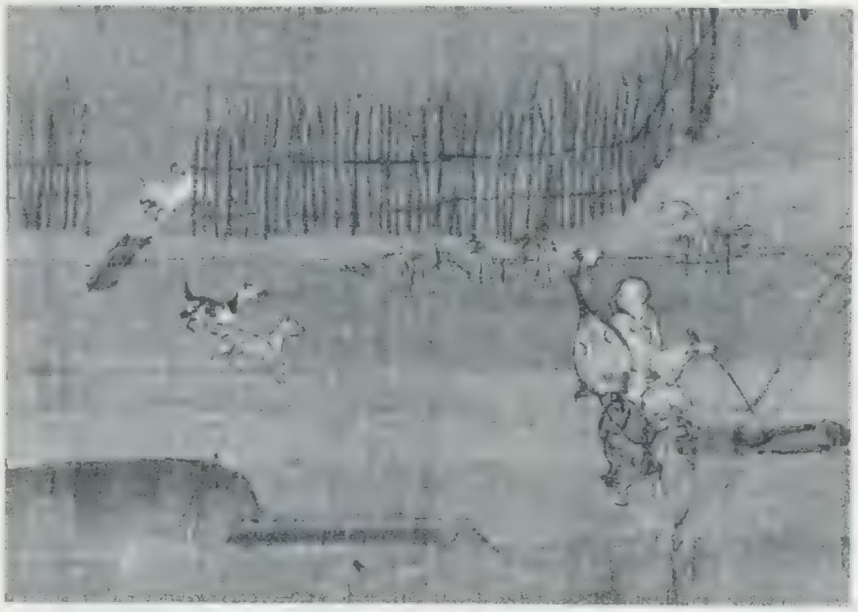
中国のチャウチャウが，パリア犬の淘汰によってつくられたように，現在の日本犬も日本に定住していたパリア犬系統のものから，今のような規格に作成されるようになったと思われる。

進化のうえでは，スピッツ，チャウチャウなどと同じように，たぶんに原始型をもったまま分化しており，*Canis japonicus* という学名はまだ犬種の検討がじゅうぶんでなかった過去のもので，ポメラニアン型犬 *Canis familiaris palustris* に入れるべきである。同様なことはオーストラリアの野生犬ディンゴについてもいえ，*Canis dingo* でなく *Canis familiaris putiatini* にすべきだ。

現在，日本犬といわれる犬種は，赤褐色，黄褐色，白地，黒地が規格となっているが，明治以前の日本の文献によると絵巻物にしても，徳川時代の本の挿絵にしても，白黒斑，白赤斑が出てくる。このなかで黒地に白斑のあるものは，ニューギニアから熱帯太平洋諸島に広く分布する，パプア犬といわれるイヌの系統ではないかと考える。



江戸時代の狩りイヌ　鷹狩図屏風（部分）　久隅守景筆



街犬に追われる琵琶法師　一遍聖絵（部分）　京都・歓喜光寺蔵

ところが，これらのイヌは，明治以降，とくに日本犬の規格ができたときにはずされてしまったため，現在ではその姿はほとんど見られない。しかし，白黒斑のイヌは，平安朝時代から宿直犬として用いられ，また今でも，子どもが生まれたときにする宮参りの犬張子にも残っており，徳川時代にはイノシシ狩りにこのイヌを用いる習慣があった。これらのイヌも日本犬のなかに入れるべきであろうと思う。

純日本犬とは違う秋田犬

日本犬の系統をみるうえで，大型犬と呼ばれている秋田犬は，紀州犬や柴犬といった中型・小型のものとは区別したい。尾を巻いているところからみて，家畜として長く飼育されたものと思われるが，中型・小型犬とは少し違っている。秋田犬種の番犬型のイヌは，漢代の中国にも記録があり，中国のものが大陸と陸続きだった時代に日本にきて，島となってから人に育てられ，秋田地方に生息したものと思われる。元来，白と黒の斑が多いが，第二次大戦後，他の日本犬の血がはいったものか，褐色のものも見られる。秋田犬は遺伝子からみても，中型・小型犬とは違った犬種としたい。

中型犬はもっともふつうの日本犬であり，巻き尾もたれ尾もある。日本各地で，形態的な多少の差があるので，北海道のものを北海道犬〔アイヌ犬ともいう〕，紀伊（和歌山）のものを紀州犬，土佐（高知）のものを土佐犬〔四国犬〕などと呼んでいる。それぞれが1つの品種のように思われがちだが，これらはたがいに交雑の傾向もあり，みな，ふつうに日本犬といわれるものである。

小型日本犬は柴犬に代表されるが，柴犬のなかにも大小さまざまある。柴犬は中型犬の小型化したもので，中型犬と同じにみてよい。

カラフト犬は古くから日本にいるが，エスキモー犬の一種であって，野生時代からいたものか，北方民族が移入したものかはわかっていない。

徳川時代に，サツマダネといって肢の短い小型の座敷犬や，リュウキュウといった沖縄産のものがいたらしいが，その形態ははっきりしていない。

犬種の数は数えきれないほどあるが，その大部分はヨーロッパ，とくにイギリスでつくりだされたものである。日本でつくられたものはごくわずかで，世界的に有名なものは日本チン（狆）である。中国の北京チン〔ペキニーズ〕から分化したもので，徳川時代につくりだされたと思われる。

闘犬として知られる土佐闘犬は，土佐犬とは別のもので，明治のはじめに，土佐犬を土台にして，ブルドッグ，マスティフ，ポインターなどを交雑して強いイヌにつくったものである。

イヌの日本文化史

日本では，遠いむかしからイヌは家の

→ *

カラーページ注

〔注1〕 **山地犬**　イヌは一般に，発生した土地の環境に順応する形態をとっている。たとえば，砂漠から出たグレーハウンドは細身で短毛であり，山岳地帯に出たチベッタンマスティフなどは，大型，長毛でどっしりとしている。山地犬というのは，形態や歴史からみて，山岳に発生した共通する特徴をもっていると思われるイヌである。

〔注2〕 **同伴犬**　イヌの運動のためでなく，人間の散歩のためにヨーロッパ人などはイヌを連れて歩くが，そのときに装飾用のアクセサリーとして意図的に同伴するイヌが同伴犬である。主として愛玩犬が多いが，若い婦人などは美しいボルゾイやコリーなどを，自分のすばらしさを強調するために連れていく。

〔注3〕 **シェパード**　日本でシェパードといっているのはドイツ牧羊犬だけをさしているわけだが，シェパード (shepherd) とは，ヒツジ飼いのことであり，ヒツジ飼いのイヌ，つまり牧羊犬 (shepherd dogs) 一般のことを意味している。シェパードをシェファードと発音しないのは sheep herd（ヒツジの群れ）からきているためである。また，シープドッグ (sheep dogs) ともいわれる。■

（内田　亨）

ヒグマと2人のイノシシ 30

いよいよトウメイ高速へ



畑　正憲



いろいろな薬を飲ませてみたが，下痢はいっこうにとまらなかった

夢の超特急——。

そう笑っているうちはよかった。たとえ下痢をしても，3日に1キロの割で体重が増えていった。ただつきっきりでシモの始末をしなければならぬ点が厄介であるだけだった。

薬の方は弟が験した通りだった。器具を使って奥の奥まで突っこんでも，どんべえは必死になって吐き出した。変と言えば変，僕には初めての経験だった。

あまり効果がないので，薬の方も換えてみた。T製薬，S製薬，D製薬などなど，人間用の下痢ドメを各種買ってきて体重割より多めに使ってみた。

けれども効果がない。まるで水のような便が噴出して，床に小さな流れをつくった。その便を本や万年床につけないだけでも大変な労働である。

思い余って上川へ電話すると，

「子グマの下痢はないわけじゃないが，水みたいなのは珍しいねえ。役に立つかどうか知らないけれど，おやじはカタクリ粉を生のまま練って食べさせていたよ。ものは験しだ，やってごらん」

と，間見谷さんが教えてくれた。

飼育下の子グマは，かなり長い間軟便をするそうだ。事実，上川で4頭が勢揃いした時には，人だったら下痢だと判断されそうなやわらかい糞をしていた。けれどもどんべえの下痢は，形さえ失っていたのである。

名峰ニセコアンナプリにちなんで命名されたどんべえのきょうだいニセコは，すでに戸外につながれ，形のある便をし始めているとのことだった。町議の選挙の際，宣伝カーに乗って愛敬をふりまいた時に体調をこわしたが，やっとそれも快方へ向かったという。

僕はカタクリ療法をやってみた。

「うまくいくかな」

「いいようだぞ。もう1時間も便をしないから」

最初，それはうまくいっているように見えた。が，2度目，3度目になると，どんべえが練ったカタクリを食べなくなってしまった。砂糖，ハチミツ，ミルク，特製のシロップ……何を加えても駄目である。匂いを嗅ぎ，ほんの僅か舌の先をつけるだけで，ぷいと横を向くようになった。

それだけではない。キャラメルやチーズでも吐き出すようになったし，指につけたハチミツさえ拒否するようになった。そして濁りのある声で，

「アーアッ，アーアッ」

と，繰り返して純粋なミルクをねだった。

うなり声が一区切りする瞬間，器用に語尾をはね上げるのが食物の要求である。口はとんがり，下唇の端が垂れ加減になる。そしてときどき短く舌を出し，慌てて引っ込めて舌なめずりをする。

あの細い目が，哀願をこめて細くなっている感じがする。いくぶん上目使いになっているので，下に白い線が見える。

その表情を見ていると，僕は人間の子を育てている錯覚にとらわれた。黒くたくましいかたまりではあるが，人間そっくりに見えた。

「いい子だねえ，どんべえ」

自然と僕は呟いている。

「待ってなさいね，すぐミルクをつくっ

---

* ————→

外に放し飼いにされてきたらしい。万葉集にも，「狗じもの　道に臥してや　命すぎなむ」（イヌなどというものは，道ばたにいて一生を終わるものだ）といううたがあり，この時代にはのらイヌが主であったことを示している。「枕草子」に出てくる翁丸というイヌについてみても，ネコは官位をもらって命婦がかしずいているのに，イヌは外に飼われていて，官位のあるネコをおどしたというだけで打ちのめされ，犬島（岡山県の犬島かどうかは不明）に流されている。

ことほどさように，ネコにくらべてのイヌの地位は低いわけで，室町時代の絵巻物をみても，イヌは家の外に飼われ，街犬〔ストリート•ドッグ〕となっている。その形態をみると，立耳あり，たれ耳あり，毛色もいろいろで，毛の長さも，大きさもさまざま，尾も巻いているもの，立っているものとある。この時代は街犬の数も多かったらしく「徒然草」のなかで兼好法師は，用心のためにイヌを飼うことをすすめ，そのイヌは簡単に手にはいる，といっている。

戦国時代になると，スペイン，ポルトガルとの連絡もつき，武士がマスティフ型の猛犬を輸入した記録がある。このイヌは，徳川時代になって，大名行列の前に歩かせた。いわゆる唐犬の一部となっている可能性もある。

唐犬は，徳川時代に北斎などによっても描かれ，また滝沢馬琴の小説「南総里見八犬伝」のなかに出るイヌ，八房のモデルとなっている。たぶん，当時，唐犬は流行物であったろうと思われる。

一般に江戸市中で飼われていたイヌの形態は，犬公方で知られる5代将軍綱吉が，各町のイヌを登録させた戸籍簿，「御犬毛付帳」でわかる。それによると室町時代とほとんど変わらないようだ。しかし，数はわずかだろうが輸入された洋犬がたいせつに飼育されていた可能性はある。

明治になって鎖国が解かれると同時に多数の洋犬がはいってきた。洋犬は，人間との接触に長い歴史をもっているため，街犬であった日本犬よりも人になつきやすく飼いやすい。そのため，洋犬を飼う人がふえ，日本犬との雑種も生じて，江戸時代までの街犬の形態とはすっかり変わってしまった。

第二次大戦中は，軍用犬としてのシェパード，ドーベルマン，エアデールテリア以外のイヌは飼育を禁止するような政策がとられたため，一時，犬界は衰えたが，戦後は以前にもまして洋犬が飼われ，その数といい種類といい豊富で，また日本犬の愛好家もふえて，にぎやかな犬界の状態となっている。■

てあげるから」

自分の口からそういう台詞がとびだすのを，僕は信じられなかった。

その優しげな調子ったらない。これまで一度も僕の口を出た憶えがない，甘ったるいわざとらしい声音。もし他人に聞かれたら，僕は卒倒するか恥ずかしくって自殺したかもしれぬ。

でも，それは僕の口からやすやすと出た。何の抵抗もなしに。

僕の判断では，クマのいわゆる知能は高くない。理知的な判断，ものを客観的にみる能力などは，哺乳動物の中でも低い部類に属するのではなかろうか。

しかし，それに代えて素晴らしい感受性を持っている。感情と感情の交流といった点では，イヌよりもずっと高級である感じがする。

これまで僕は次のような質問を受けて困った。

「ゾウとウマはどちらが賢いか」

「イヌとネコでは？」

大自然に生きるものとして，動物はそれぞれ賢い。その生活を知れば知るほどのっぴきならぬ能力を持っていて，その能力が低ければ低いなりに他者と調和している。知能が高いか低いかといって，一概には比べ得ぬ。

知能と言う場合，後天的に学習する能力や，チンパンジーが箱を積み重ねてバナナをとるようなより高次の神経作用を指すことが多い。

が，年と共に，僕はそれだけが知能ではないと思うに至った。感情の幅と言うか，喜怒哀楽の源になる生きる意志の大きさというか，命あるものの根底，特に哺乳動物の根底にはそれがある気がしてならぬ。そしてそのものこそ，月へ到達する技術を生む才智と並んで，人には欠くべからざる知能であると考える。あるいは字句の解釈が違うかもしれぬが，これほど目茶苦茶になった日本の国土の上に人が住んでいることは，才智以外の知能の存在を考えざるを得ぬではないか。

ともあれ，どんべえを育てつつ僕は息がつまる思いをすることがしばしばだった。他の哺乳動物を育てた経験とあまりにも違う手応えに驚き，

「あまりにも人間的でかなわねえや」

と，日記に捨て台詞を書いたりした。

まさしく僕は，人間的な感情の広さ，それも理知でくるまれぬむきだしのかたまりにぶつかっていたのである。

子グマを捜して北海道をさまよった時，クマを育てた経験がある人は口を揃えて言ったものだ。

「そりゃ何と言ったってクマは面白え。イヌやネコを飼うのとはわけが違う。クマァ飼ったらよう，他の動物を飼う気がしなくなるで……」

その言葉が今しみじみと僕のからだにしみこんできている。

これは独立性が強い動物であるせいでもあろう。イヌならば，飼い主が叱ったら尾を後足の間に入れ，耳を伏せて一途に従属の意を示す。

しかしどんべえは違う。叱って聞きわけるまでの間に，実にさまざまな動作をする。反抗してみたり，附近のものに八つ当たりしてみたり，

「フウッ」

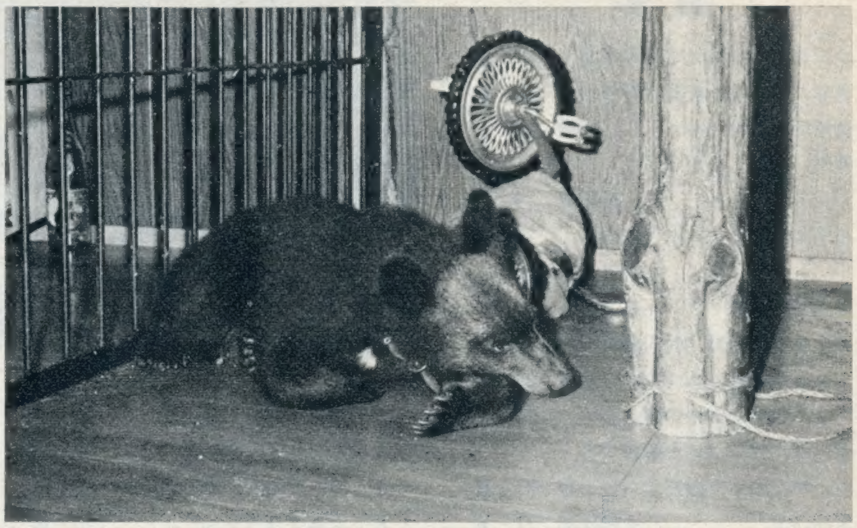
と荒い息を吐き，小走りにぐるぐる回って怒りを発散させた後で，お尻から近づいてきて愛撫を要求したりするのだ。その間の複雑な葛藤を見ていると，どんべえがクマだとは思えない。人間そのものがどんべえの中で息づいている感じがする。だから僕はごく自然に，

「ちょっと待ってね」

などとどんべえに語りかけたのではなかろうか。この歳になってぬけぬけと。

しかし——

あらゆる努力の甲斐もなく，どんべえの下痢は激しさを増した。ひどい時には1時間に3回から4回，僅かに黄色い液体をたれ流した。



さすがのどんべえも下痢には勝てない。ぐったりとうずくまりがちだ

それだけ下痢をすれば，当然のことながら小便の方はお留守になった。日に1回か2回で，あとははっきり食物のカスが入っている大便だった。

こうなればむろん体重の増加もストップである。水分を吸収する腸管の働きが狂っているし，それが整腸剤で押えられぬのなら，何か深刻な病気だと考える他はなかった。

ついに，大便から黄色の色が消えた時僕は叫んだ。

「夢の超特急からトウメイ高速に乗り替えやがったぞ。どんべえめ，急テンポで時代を追ってやがる」

けれども，シャレどころではなかった。どんべえは体調の異変に苛立ち，僕と弟の防護壁を破って娘のお尻に喰らいついたのである。■

動物渡来記　5（最終回）

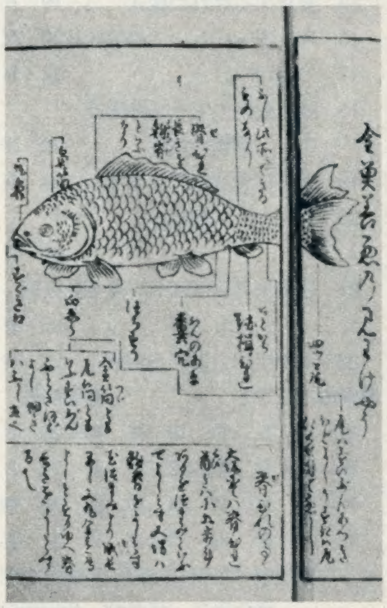
浮世絵にもなったキンギョ

上野益三

町をいくキンギョ売りの呼び声は，初夏の風物として，われわれ庶民の生活に親しまれたが，近年はほとんど聞かれなくなった。しかし，家庭における愛玩動物としてのキンギョは，近年盛んになった熱帯魚にその席を譲ることなく，ゆるがぬ王座を保っている。それには300年に余る日本での長い飼育の歴史がある。そのキンギョの原産地が中国本土の南部だということに，気がついている人は案外少ないらしい。中国でキンギョが飼育され始めたのは，およそ10世紀ごろだといわれている宋という国の時代である。

キンギョがはじめて日本に渡来したのは，戦国時代の終わりごろの文亀2（1502）年という記録がある。今から470年近くもむかしのことだ。来た所は，「左海の津」，つまり，大阪市の南にある堺市で，当時海外との貿易の中心港であった。そのころ，中国は明の時代であったから，明からの貿易船で持ち渡られたのであろう。堺港に渡ったキンギョの運命は何もわからないが，おそらく繁殖するまでにはいかなかったと推測される。

そののち，何回も渡ってきたに違いないが，文亀2年から110数年のちの元和年中の渡来には，明らかに記録が残っている。それをかりに元和5年とすると，関ガ原戦から20年ののちで，世もしだいに泰平となり，キンギョの繁殖に力を尽くす者も出るようになったのだろう。元和からのち60年，延宝年間には，江戸の下谷にキンギョ屋ができるまでになった。しかし，まだまだ高価で，庶民にはまったく高嶺の花，わずかに，将軍，大名や富豪らの愛玩物であるにすぎなかった。



「金魚養玩草」（1748年）にのったキンギョの図

キンギョの飼育繁殖が盛んになるにつれて，キンギョ売りの露店が出るまでになったのは，宝暦のころ，1750年代である。宝暦，明和に続く安永のころ（1770年代）には，行商のキンギョ売りが出て，キンギョは庶民生活のなかに浸透した。浮世絵師らは夏の風物として競ってキンギョを版画の題材に選んだのである。

キンギョの原型は，フナであることが確かめられている。フナが赤変してヒブナとなり，さらに開き尾になったのが原始的なキンギョである。はじめて日本に渡ったものは，ちゃんと背びれのある，原始的な形態の今いうワキン（和金）である。これは寛延元（1748）年に出版された，安達喜之という人の「金魚養玩草」という本に図が出ている。この本の後篇「金魚秘訣録」には，チョウセンキンギョというものが出ていて，朝鮮を経由しても渡来したことを示唆している。このチョウセンキンギョは，明らかに背びれのないランチュウ形である。

そののち，安永天明ごろ（1770～1780年代）にリュウキン（琉金）が渡ってきた。これは背びれのあるワキン系統のものである。これら輸入品種のほかに，国内の飼育技術が進んで，ワキンからヂキンのような分離淘汰，ワキンとリュウキンとの交配による，ワトウナイのような品種もできた。さらに，多くの新しい品種が造成されたのは明治時代である。■

（動物学者）

▶おことわり　本号『もうひとつの世界』『漢字のふるさと』は休載します。



号数とページを示す数字は，誌面の下外側のものをあげた

追加と訂正

4－4　左段8行目　コンラッド・ローレンツ―→コンラート・ロレンツ

5－19 右段13行目「これからそれらを詳しく研究していこう」を削除

8－8　左段1行目
尾が退化している―→尾が長い
左段4行目　尾が長い―→尾が退化している
右段2行目　飼い主に非常に強い愛情を示すが，それはキツネザルほどではない―→飼い主に非常に強い愛情を示す

11－13　中段7行目　毎年2匹―→年に1回，1～6匹

13－13　写真説明(左)
ヒイラギ―→セイヨウヒイラギ

14－14　右段36行目　妊娠期間は4，5週間―→妊娠期間は19～20日間

16－Ⅴ　右段12行目
pimidus ―→ *timidus*

17－1　食肉目分類表のクマ科にアメリカグマ属を加える

17－20 中段10行目〔注5〕―→〔注3〕

18－1　トラの分布図のうちサハリンを白ぬきとする

18－3　写真説明　尾まで1本通り―→尾まで不連続につながり

18－Ⅴ　イラスト「猛獣の先祖たち」
鮮新世（100万年前より）―→鮮新世（1000万年前より）
フクロオオカミの？を，チラコスミルスの実線と中新世でつなぐ

23－14　写真説明（上）
putoris ―→ *putorius*

24－Ⅵ　左から2段下から10行目
putoris ―→ *putorius*

27－5　下から18行目　3月―→9月

世界動物百科 17号～32号 カラーページ総目次

ページを示す数字は，各号の誌面の下外側のものをあげた

17号



18号



19号



20号



21号



22号



23号



24号



25号



26号



27号



28号



29号



30号



31号



32号



世界動物百科 通巻32号 昭和46年10月17日発行（毎日曜日発行） 編集・発行人 大田信男 発行所 朝日新聞社 東京 大阪 北九州 名古屋 印刷・凸版印刷 定価220円







あなたの書架をさらに豪華に…

1巻に16冊とじこめる専用特製ファイル――あなたの大切な動物たちのためにもぜひご用意ください。全冊で12巻の豪華な「世界動物百科」が誕生します。定価600円

(16号ごとに便利な総目次がついています)

雑誌 0633―10／17